

社会的支援を必要とする高齢者のメイクアップを用いた高齢者・支援者双方のQOL向上の試み

当法人の調査研究事業の1つとして「社会的支援を必要とする高齢者へのメイクアップを用いた高齢者・支援者双方のQOL向上の試み」を、文化学園大学 応用健康心理学研究室 精神保健学 佐藤浩信准教授との共同研究として、平成27年4月より行っております。

これはメイクボランティアに参加したメイクの施術者（大学生）について、アンケート調査により、メイクボランティア提供の前後における生きがいや自尊感情などの変化について考察し、またメイクを受けた高齢者については、センシングデバイス（感知器具）を用いて感情の変化を数値化し、メイクの与える効果について考察するものです。

7月に、これまで3年間にメイクボランティアを通じて収集したデータに基づいて1回の訪問における高齢者へのメイクの効果について成果がまとめられ、「ファッションビジネス学会誌」に掲載されましたので、そのダイジェスト版を以下にご報告いたします。

表情表出の測定による高齢者へのメイクアップの有効性の検討

文化学園大学 佐藤 浩信

高齢者福祉施設では、国の指針に基づき最期まで個人が尊重される暮らしと、尊厳が保持された自立生活を支援するサービス提供が期待されています。また、日常生活において高齢者へ何らかの介入を行うことで行動変容を促し、高齢者のクオリティ・オブ・ライフ（QOL）の向上を目指す研究も多数報告されるようになりました。今回、高齢者福祉施設で行われるメイクの意義と有効性について、メイク実施前後で表出される表情の測定を通して検討を試みました。

表情と感情に関する研究は70年代から見られ、Ekman, P. 等により表情は「幸福」「悲しみ」「驚き」「恐怖」「怒り」「嫌悪」の6つの基本情動に分類できるとされてきました。この考えを源泉とする様々な研究により、表情は文化に依存することなく生得的な基盤の上に普遍的な特徴をもつ、と理解されています。そこで本研究では、高齢者が表出する表情を「悲しみ」「怒り」「驚き」「喜び」「真顔」の5成分で評価できる小型デバイスを用い、各成分の表出量からメイク前後の感情の推定を試みました。このデバイスは、高齢者が表出する様々な表情を0.25秒ごとに上述の5成分を捉え、各成分の特徴を数値化できるため、身体的にも心理的にも負担をかけずに測定できます。言語表現が苦手あるいは発語を嫌う高齢者においては、言語で尋ねることなく僅かな表情の変化を捉えて「今の気分」の推定が行えるため有効な手法となります。今回このデバイスをノート型コンピューターに組み込み、メイクを行う前と後の高齢者の表情を一定の手続きで測定し、得られた数値から高齢者の感情や気持ちを推定し、メイクの有効性について考察を行いました。

解析の対象は、2017年度に実施した福祉施設でのメイクボランティア時に、メイクを求めて来られた高齢者の皆様14名です。測定はメイクを行う前と後とし、メイク開始前の施術者との挨拶や会話を通じたコミュニケーション時の表情と、メイク後に自身の鏡像を確認した直後に生じる急激な気分の高揚が落ち着き退席する直前の表情としました。高齢者の方々から3メートル程度離れた位置から、同一の角度と高さを保ち計測します。捉えた表情はデバイス内で5成分の数値データに変換されますが、個人を識別できる顔画像は用いない等、プライバシーへの配慮も留意のうえ実施させて頂きました。

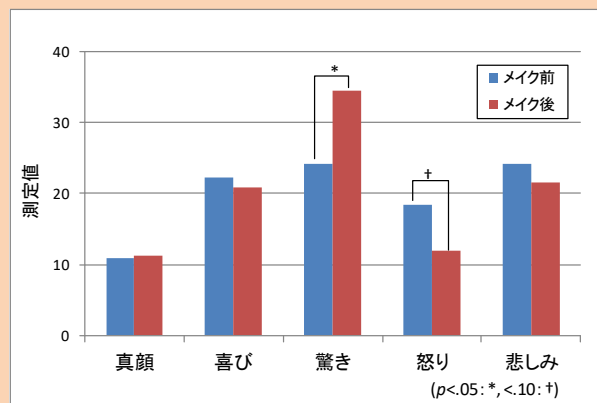


図1. デバイスによるメイク前後の表情成分の比較(平均値)

さて、デバイスを用いたメイク前後の表情成分の量的な変化をみると、「驚き」の上昇 ($p < .05$)、「怒り」の減少 ($p < .10$) が認められましたが、「喜び」に有意な変化は認められませんでした。メイク前後の表情成分の増減率をみると、「驚き」は 1.43 倍、「怒り」は 0.64 倍、「悲しみ」は 0.88 倍となりました。また「喜び」成分については、メイク前と後の間で有意な正の相関 ($p < .01$) が認められ、メイク前の表出量の多い人は、メイク後の表出量も多く、メイク前の表出量が少ない人は、メイク後の表出量も少ないようです。デバイスでの評価では、メイク後のポジティブな表情成分の上昇は認められませんが、「怒り」「悲しみ」のネガティブな成分の減率、特に「怒り」成分の減率は顕著でした (図 1)。

次に、メイク施術者 (行った人) に VAS を用いた主観的印象評価を求めたところ、「喜び」「驚き」においてメイク後の有意な上昇が認められ ($p < .001$)、変化率も大幅増となり、デバイスを用いた評価とは異なる結果となりました。一方、「怒り」「悲しみ」などネガティブな表情は、メイク前後で有意な変化は認められませんでした。施術者がもつ表情の主観的印象は、明朗な表情へ意識が向いた評価と思われ、ネガティブな表情の変化は掴みにくいようです。メイク後の驚く姿を確認しながら、施術者ならではの前向きな関わりの意識と、対象者への「激励」「尊厳」の気持ちが強く反映されたものと思われる (図 2)。

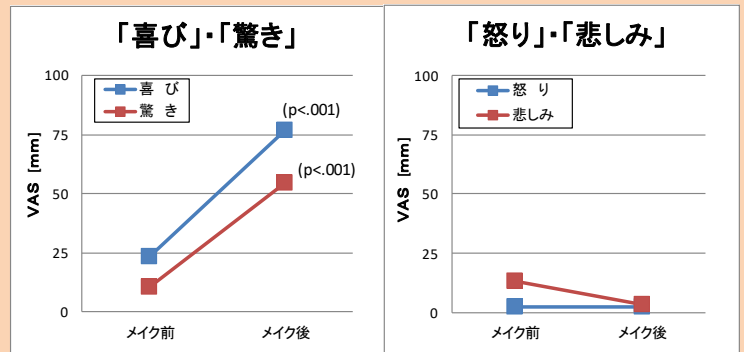


図 2. 施術者による表情の主観的印象評価 (VAS 値)

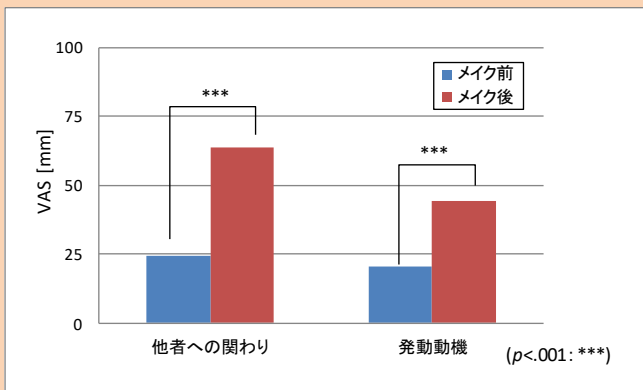


図 3. 施術者による事後の主観的印象評価 (VAS値)

また、同時にメイク施術者に高齢者の事後の様子について主観的印象評価を求めたところ、「他者と関わろうとする意識」等において、メイク利用後の上昇が認められました ($p < .001$)。個人差はあるものの、概してメイク終了後に、高齢者が前向きな言動を表出していた様子が窺えました。日々関わりをもたれる施設職員の方々の視点からも同様な評価が得られ、「綺麗になる」メイクという体験が、日常生活での快活さの維持に繋がる様相も窺えました (図 3)。その際、相手の尊厳を認める「関わり技法」などの心理的な介入を加えることで、一層の QOL の向上が期待できそうです。表出が不得意な高齢者には、鏡像を通してメイク後の姿

をゆっくりと定着させる等により、穏やかな「快」を感じられる有効なメイクの提供に繋がるものと考えられます。(詳細は以下文献をご参照頂けますと幸甚です。)

調査にご協力頂きました社会福祉法人の皆様、公益社団法人顔と心と体研究会理事長内田嘉壽子 (かつきれいこ) 先生に深く感謝申し上げます。

■文献■

佐藤浩信：デバイスを用いた表情表出の測定による高齢者へのメイクアップの有効性の検討。ファッションビジネス学会論文誌 24 巻, 1-13, 2019.

